

## 建国期マサチューセッツの地方名士ジョン・チョートに関する新史料についての一考察（その2）

和田 光 弘

【本稿は、「建国期マサチューセッツの地方名士ジョン・チョートに関する新史料についての一考察（その1）」（『名古屋大学人文学研究論集』第4号、2021年3月〔以後、「前稿」と表記〕の続きとなる】

### 5. 新史料の翻刻——1791年11月21日の第2回競売結果

前稿では、「はじめに」で述べた筆者私蔵の新発見史料のうちの1点目、さらにその全8ページ中、最初の3ページ分、すなわち1791年11月14日の競売結果を記した文書（会計簿）を紹介・分析したが、本稿ではそれに続く2ページ分、すなわち1791年11月21日の競売結果を記した文書（会計簿）を、まずは俎上に載せる（本稿末の写真、史料4・史料5）。すなわち、11月14日の第1回目の競売からちょうど1週間後の21日におこなわれた第2回目の競売である（当該史料に記されたページ番号も、「第4ページ」で終わる第1回目競売の史料に続く形で、「第5ページ」から始まっている）。

新史料には、さらにこれ以上の競売の記録が収録されていないことから、この計2回の競売により、故ジョン・チョートの動産（生産財・消費財）の多く（おそらくは、そのほとんど）が売却されたと考えられる。この第2回目の競売史料の冒頭に掲げられたタイトルは次の通りである。

「1791年11月21日実施の競売により売却された家財の勘定（Account of Things Sold at vendue, Nov [November] 21th 1791）」

次行に、やや小さな文字で「売却された物品及び購入者氏名（Articles Sold and purchasers names）」と追記されているとはいえ、第1回目の競売の史料に比して、かなり簡略なタイトル表記となっているのは、むしろ第2回目ゆえであろう。前稿でも触れたが、本史料の筆者は不詳であるが、筆致やスペリング、計算の正確さなどから、素人の親族とは考えにくく、おそらくは当地の公証人か法律家と想定して間違いなからう。

さて、前稿と同様に、上記、原史料の2ページ分を翻刻し、極力、オリジナルのレイアウトや表記を尊重しながら、なおかつ、わかりやすくまとめたのが表5である。大文字・小文字の別や、数値の表記法なども、原史料に倣って忠実に写している。前稿と同じく、若干の注記を述べるならば、まず1行目の“Line”、“Name”、“Item”の語は、表の構造を示すために筆者が付したもので、左端のコラムの行番号も、原史料の改行に忠実に対応させつつ、著者が新

表5 ジョン・チャョートの家財に関する第2回競売結果

Line	Name	Item 1	Item 2	Item 3	Item 4	What sold for			What received			
						£	s.	d.	£	s.	d.	
[5]												
Account of Things Sold at vendue, Nov [November] 21 <sup>th</sup> 1791												
Articles Sold and purchasers names												
1	Joseph Perkins	1 Tierce 9 <sup>d</sup>							•	9		
2	George Pierce	1 d <sup>o</sup> 8 <sup>d</sup>	1 bar: [barrel] 6 <sup>d</sup>	1 Canoe 11/.	pound 1/7	—	13	9	—	13	9	
3		nail drawer 1/3 <sup>d</sup>	Coopers addz [adz] 2/7 <sup>d</sup>	2 doz <sup>n</sup> [dozen] hook 8 <sup>d</sup>	meat tub 11 <sup>d</sup>	•	5	5	—	5	5	
4	George Choate	1 Cyder bar: 1/10 <sup>d</sup>	H.hid. [hide] 1/1 <sup>d</sup>	Coffee mill 2/2 <sup>d</sup>			5	1				
5		plow span shackle 7 <sup>d</sup>	Clothes Horse 3/2 <sup>d</sup>	2 Silver Spoons 17/6 <sup>d</sup>		1	1	3	•	3	2	
6		Silver Cann [Can] £4.16.0	Wheel 5/4	bedstead 15/4		5	16	8				
7		Barrel Chum 7.	Cheese tub 7/8 <sup>d</sup>	money Scales 4/4 <sup>d</sup>		•	19	•				
8	Daniel Low	3 bars 1/.	Square box 1/8 <sup>d</sup>	3 milk pans 1/1 <sup>d</sup>		—	3	9	•	3	9	
9		1 C. [Cask?] of Junk 4/5 <sup>d</sup>	fish Scales and Weights 18/.			1	2	5	1	2	5	
10	Joseph Cogswell Jnr	2 bar. 10 <sup>d</sup>				—	—	10	—	•	10	
11	Aloses Lufkin	1d <sup>o</sup> 2 <sup>d</sup>	Shave 2/.	5 Tea Spoons 12/.	22 lb Chees [Cheese] 11/.	1	5	2	1	5	2	
12	Joseph Patch	Salt mill 2/2 <sup>d</sup>	box iron & heaters 2/.			—	4	2	•	4	2	
13		2 doz <sup>n</sup> buttons [buttons] 2/2 <sup>d</sup>	2 p <sup>r</sup> [pair] buckles 10 <sup>d</sup>	Carpeting 1/3 <sup>d</sup>		—	4	3	•	4	3	
14	David Choate	10 lath boards 2/	foresail 7/1 <sup>d</sup>	12 bottles 2/		•	11	1				
15		Sickle 9 <sup>d</sup>	p <sup>r</sup> towels 3/	pewter dish 4/8	2 Silver Spoons 15/6	1	3	11				
16		round back Chair 4/2 <sup>d</sup>	2 Table 6/.	Mare £6. 6. 0		6	16	2				
17		Great Coat 39/.	pair Boots 19/.			2	18	0				
18	Abraham Channel	17 lath boards 3/1 <sup>d</sup>	beetle rings 10 <sup>d</sup>			•	3	11		3	11	
19		1 C. Junk 5/2 <sup>d</sup>	4 C. d <sup>o</sup> at 5/4 <sup>d</sup> [21/4 <sup>d</sup> ]	Covering 5/6 <sup>d</sup>		1	12	0	1	12	0	
20		Carpeting & tuwel? [towel] 5/4	Card Table 31/.	bead tray 2/.		1	18	4	1	18	4	
21		bar. [barrel] with turpentine 5/2				•	5	2		5	2	
22	Capt. [Captain] Daniel Giddings	Sled 3/.	Scin [Seine] 1/6 <sup>d</sup>	Bible 7/9		—	12	3	—	12	3	
23		post axe [ax] 2/.	fender 7 <sup>d</sup>	2 doz <sup>n</sup> buttens [buttons] 2/2 <sup>d</sup>	2 p <sup>r</sup> buckles 1/.	—	5	9	—	5	9	
24		Broad Axe 3/7 <sup>d</sup>	Cheese more 8 <sup>d</sup>	Silver Spoon 8/6 <sup>d</sup>		—	12	9	—	12	9	





たに付した。一方、“What sold for”、“What received”の表記は原史料のままで、むろんそれぞれ「売却 [落札] 金額」、「領収金額」の意である。また、原史料の「第5ページ」の最終行に置かれた“Carried forward”の語、また「第6ページ」冒頭に置かれた“foot brought forward”の語も原史料のままで、それぞれ「次葉繰越」、「<sup>けした</sup>卦下繰越 (b.f.)」となる。

この表について、細かな点も含めて、いくつか重要な注記をしておきたい(少々小さいが、表中の括弧付きの番号をご覧いただきたい)。まず、(1)を付した27行目の“S\*d\* [Spade] 2?!”、すなわち文字のかすれ(\*の箇所)により、必ずしも定かではないものの「踏み鍬 2 シリング」と推測されるアイテム3について、落札額2シリングがその行の小計(5ポンド11シリング)に含まれていない。加えると、むろん5ポンド13シリングになるが、領収額が5ポンド11シリングであることから、それに引きずられて、このアイテムの算入を失念した可能性がある(もしくは意図的に削除した可能性も否定できない)。

次いで35行目の(2)であるが、アイテム1の“1 pair Boots 7/1<sup>d</sup>”、すなわち「ブーツ1足、7シリング1ペニー」については、「遺産に属していなかった」と過去形で史料中に注記されており、これは競売後に判明した事実であろう。おそらく扱いに若干苦慮したと想像されるが、競売時の状況をそのまま受け入れる形で、結果的には売却金額に算入されており、代金も受領されている。

さらに(3)を付した第5ページの総計額、すなわち同ページ最後の「次葉繰越」(第6ページ最初の「<sup>けした</sup>卦下繰越」も同じ)である39ポンド6シリング7ペンスについて、これは正確には39ポンド6シリング5ペンスとなる(さらに上記の踏み鍬の2シリングを加えると、39ポンド8シリング5ペンスとなる)。わずかな差であり、むしろ同史料筆者の計算の正確さを示しているといえるかもしれない。

(4)は、第6ページの5行目に関するものである。最初のアイテムに“11 Dozen buttons [buttons] at 7<sup>1</sup>/<sub>2</sub><sup>d</sup>”、すなわち「1ダース当り7.5ペンスのボタン、11ダース」とあるが、これは計算すると82.5ペンス、すなわち6シリング10.5ペンスとなる。しかし、この行の小計(これがすなわち(4))を見ると、2ペンス足りない(正確には2ポンド17シリングとなるはずである)。この原因はおそらく、最初のアイテムであるボタンの計算(この額はリストには載っていない)を誤り、82.5ペンスではなく、80.5ペンスとしてしまったためと考えるのが、最も蓋然性の高い推測となろう。

次に26行目の(5)であるが、売却金額の9シリング9ペンスに対して、領収金額が1シリング2ペンスと、極端に低い。むろん、これが実態であったのかもしれないが、一方で1行上(すなわち25行目)の領収金額を見ると、完全に同額の1シリング2ペンスである。あくまでも推測ではあるが、上の行の数値に引きずられてしまった可能性は否定できないのではなかろうか。その場合、領収金額は売却金額と同額の9シリング9ペンスであった(すなわち、歴史の実態としては、満額支払った)可能性が高い。もちろん、これはあくまでも推測にすぎな

いため、史料上の数値をむやみに訂正することは避けるべきであり、注記に留めておきたい。

30行目の売却金額、領収金額ともに9シリング10ペンスとなっているが、売却金額の小計(すなわち(6))は、正確には8シリング10ペンスである。これもおそらくは、2番目のアイテムであるチーズの計算を誤った可能性が高い。もしも史料上の領収金額が正確だとすれば、求められるまま、落札者のアンドルー・ウッドベリー・ジュニアは、1シリング多く支払ったということになる。

(7)は、第5ページと第6ページの総計である。第6ページだけの合計は51ポンド6ペンスであり、第5ページと合算すると90ポンド7シリング1ペニーとなる。この計算は正確であるが、上記、纏々述べたように、途中に微細な計算ミスがあるため、完璧とは言えないであろう。

とまれ、第1回目、第2回目の競売を通してみると、第2回目の競売については、消費財などを中心とした家財が多く売りに出されており、生産財が中心だった第1回目の競売と比して、かなり明瞭なコントラストが認められる(ただし、第1回目でも、書籍や布類は見られるし、第2回目にも、工具関係は多く含まれている)。第1回目の競売の売上総額は、およそ276ポンドであり、この第2回目の総額約90ポンドとはかなりの差があるが、やはりアイテムの内容(そしてアイテムの総数自体)に起因したものであろう。今回も個々のアイテムの具体相は非常に興味深く、文字通り、当時の生活実態を如実に示すタイムカプセルとなっている。さらに、「寝台」など、寝具関係のアイテムをカウントすれば、チョートの家屋の大きさ(部屋数)なども推測できる可能性がある。ともあれ、この第2回目の競売のリスト(表5)と、第1回目の競売のリスト(前稿の表3)については、さらに次稿において、それぞれのアイテムの訳語を付すとともに、売却先の人物別にまとめて新たな表を作成し(さらに代金の領収率なども提示し)、それらの人物とジョン・チョートとの関係について考察を進める予定である。

## 6. 記載の順を統べるもの

さて、第1回目の競売結果(表3)と第2回目の競売結果(表5)を改めて眺めると、シンプルながら興味深い疑問がわく。すなわち、その記載は、どのような順番でなされているのかという問いである。人名が最初に置かれているが、もちろん、人名のアルファベット順でないことは明らかである。また、必ずしも同性(すなわち一族)ごとに記されているわけでもない。人名に関してみれば、むしろランダムな印象すら受ける。

この問いに答えるためには、この史料のそもそもの成り立ちから考察する必要がある。すなわち当該史料は、競売当日の現場で生成されたものではない。競売の現場では、第1回目、第2回目ともに、オークションによって次々とセリが行われ、喧騒のなかで落札結果が何らかの用紙に慌ただしく記載されていったことは間違いがないが、それは理路整然と記された、

このわれわれの史料ではない。前者の用紙(仮に第1回目競売のそれを史料A、第2回目競売のそれを史料Bとする)を整理しつつ、またその後確定した領収金額等も併記しつつ、遺産相続に際して法的に有効なようにまとめられたのが、当該史料といえる。したがって、われわれの史料は、競売現場で生成された史料A・史料Bから、ある程度の日数(当時の遺産相続の例からすれば数か月程度)を経て、生み出されたものである。

このわれわれの史料の生成に到達するためには、まず史料Aと史料Bについて、それぞれを人名ごとにまとめる作業が必要であったろう。むろん双方の競売に参加した者(つまり双方の人名で重なるケース)もあるが、それらを統合することはなく、厳密に史料Aと史料Bは分けられて(すなわち第1回目の競売と第2回目の競売は別々に)、整理されたと考えられる。そしてその後、双方の競売について、それぞれ人名ごとにまとめられた複数(もしくは単数)のアイテムをユニットとして、あくまでも双方の競売別々に、この新史料に記載していったと考えられる。それでは、その記載の順番はどのようなものだったのか。そこに何らかの原則ないし法則のようなものは見出されうるのか。行論で明らかになるように、順番は決してランダムではなかったのである。この一種の法則めいたものは、おそらく、この史料を生み出した人物のみの属性(個性)に帰するものではなかったと思われる。すなわち、当時の同様の史料において、ある程度広く実践されていた原則である可能性が高いと考えられるのである。なんとすれば、この史料は相続における法的有効性を担保するための文書であり、その書式には、一般に広く理解を得るために、おのずと一定の書法ないし傾向が存在すると想定されるからである。本節で明らかにするその原則は、少なくとも同時代の他の同様の史料を考察する際にも、応用可能なものである蓋然性が高いことをまずは確認しておきたい。

さて、表3と表5を虚心坦懐に眺めると、ある2つの興味深い事実気づく。まずはその1点目から見てゆこう。それはすなわち、各落札者の最初のアイテム(Item 1)が、まったく同じモノ、もしくは同一カテゴリーに属するモノが連続する例が頻出しているという事実である。たとえば表5で見れば、最初に記された人物、すなわちジョゼフ・パーキンズのそれは「[1ティアス入りの]樽」であり、2番目に記された人物ジョージ・ピアスのそれも、まったく同じである。さらに3番目の人物ジョージ・チョート(4行目)の最初のアイテムは「リンゴ酒樽」であり、4番目の人物ダニエル・ロウ(8行目)、5番目の人物ジョゼフ・コグズウェル・ジュニア(10行目)、6番目のアローズ・ラフキン(11行目)は皆、最初のアイテムは「樽」である。すなわち、1番目から6番目までの人物の最初のアイテムは、すべて樽関係となっている。これはとても偶然とは思えない。背後に史料筆者の強い意図を想定するのが自然であろう。同様の例は、実際に非常に多く指摘できる。そこでまずは、第1回目の競売(前稿の表3)から具体的に見てみよう。表3から相互に関連する最初のアイテム(Item 1)を抽出してまとめたのが表6となる。

この表を見ていただければ一目瞭然である。第1回目の競売史料「第2ページ」の1行目



表6 最初のアイテムの相互関連 (第1回競売)

頁	行	アイテム
2	1	干し草刈り鎌 (hay hook)
	5	熊手 (rake)
	6	股鋏 (fork)
	7	干し草用三叉 (pitch fork)
	9	馬車用引き革 (horse trace)
	10	馬用首輪 (horse collar)
	11	鎖 (chain)
	13	
	16	草刈り大鎌 (scythe)
	17	馬勒 (bridle)
	18	
	19	鞍 (saddle)
	20	
	23	鋤 (plow)
	24	
	25	雌牛 (cow)
	26	
28		
30	去勢牛 (steer)	
31	雌牛 (cow)	
32		
33	未經産雌牛 (heifer)	
34		
35	子牛 (calf)	
36		
3	1	軛につないだ牛 [雄牛] (yoke oxen)
	5	子豚 (pig)
	6	
	7	
	9	豚 (hog)
	12	
	13	
	14	本 (book)
	17	
	18	
	20	年代記 (chronology)
	21	世界地名辞典 (universal gazetteer)
	22	ラテン語本 (Latin book)
	23	本 (book)
	24	
	25	
	27	
28		
29		
30	小冊子 (pamphlet)	
31		
32		
33	本 (book)	
34		
35	本 (book)	
36	[ベッドの] 上掛け (coverled)	
37		

表6 続き

頁	行	アイテム
4	1	キルト (quilt)
	4	シーツ (sheet)
	6	
	7	ナプキン (napkin)
	9	
	10	テーブルクロス (table cloth)
	11	
	14	干し草 (salt hay, English hay)
	16	
	19	
	20	
	21	
	22	
	23	
24		
26		
27		

表7 最初のアイテムの相互連関 (第2回競売)

頁	行	アイテム
5	1	[1 ティアス入りの] 樽 (tierce)
	2	
	4	リンゴ酒樽 (cyder barrel)
	8	樽 (barrel)
	10	
	11	
	14	木摺 (lath board)
	18	
	28	ピッチ鍋 (pitch pot)
	29	ピッチ用モップ (pitch mop)
30	ピッチ (pitch)	
34	瓶 (bottle)	
36		
6	9	ケース・瓶 (case & bottle)
	11	
	12	長柄鋏 (hoe)
	14	樽用斧 (coopers)
	15	手挽き鋸 (hand saw)
	17	手斧 (adz)
	19	鑿 (chisels)
	20	鑿 (spanshackle)
	28	絨毯地 (carpeting)
	29	絨毯地片 (piece do)
31	寝台・家具 (bed & furniture)	
32		
36	ズボン (trousers)	
37	ボタン (button)	



から7行目まで(人数で言えば4名)は農具関連、9行目・10行目(2名)は馬具関連、11行目・13行目(2名)は鎖、16行目・17行目(2名)は草刈り大鎌(農具関連)、18行目から20行目(3名)は馬具関連、23行目・24行目(2名)は鋤(農具関連)、また、ページをまたいでいるが、25行目から「第3ページ」の2行目まで(12名)は牛関連、5行目から14行目まで(7名)は豚関連、17行目から35行目まで(17名)は書籍類、また、ページをまたいで、36行目から「第4ページ」の11行目まで(9名)が布類、そして14行目から27行目まで(10名)が干し草、である。

この同一アイテム、もしくは同一カテゴリ内のアイテムが連続する割合は、人数で表した場合、「第2ページ」中では、全26名中25名(96.1%)、「第3ページ」中で、全30名中28名(93.3%)、「第4ページ」中では、全20名中17名(85.0%)、そしてこの第1回目の競売全体で言えば、全76名中70名(92.1%)となる。いずれをとってもほぼ9割前後の高率であり、これはもはや法則といっても過言ではない。

それでは、第2回目の競売に関してはどうかであろうか。表5から相互に関連する最初のアイテム(Item 1)を抽出してまとめたのが表7である。

すでに述べたように、第2回目の競売史料「第5ページ」の1行目から11行目まで(人数で言えば6名)は樽関係である。14行目・18行目(2名)は建築資材の木摺(ラスボード)、28行目から30行目(3名)は塗装材のピッチ関係、ページをまたいで、34行目から「第6ページ」の11行目まで(4名)は瓶関係、12行目から20行目まで(6名)は工具関係、28行目から32行目(4名)は絨毯・寝具関係、36行目・37行目(2名)は服飾関係、である。

この同一アイテム、もしくは同一カテゴリ内のアイテムが連続する割合は、人数で表した場合、「第5ページ」中では、全18名中13名(72.2%)、「第6ページ」中では、全32名中14名(43.7%)、そしてこの第2回目の競売全体で言えば、全50名中27名(54.0%)となる。この第2回目の競売のほう(とりわけ「第6ページ」の場合)、第1回目と比して、やや「小物」のアイテムが多かったせいか、比率は低くなっている。第1回目で、「大物」の生産財を多く競売に付したために、同一カテゴリに分類できるアイテムが減ったためでもあろう。とはいえ、それでも半分以上の比率であり、さらには、第1回目、第2回目の競売すべてを通して計算してみると、のべ126名(むろん重複する者もいるため、単純合計)中97名(77.0%)となり、これは8割近くに適用できる原則と断言できる。

それでは、この原則だけで、史料中の人名の順序を説明できるのだろうか。この原則はあくまでも同一のアイテム、同一のカテゴリの生成についての説明であって、さらにそれらの間の順序の原理を見出す必要がある。前述したように、第1回目と第2回目では、競売に付されたアイテムの種類がかなり異なるため、順序の更なる説明のためには、それぞれの回に分けて分析し、この2回に共通する第2の原理を見出さなければならない。

さてここで、本節の最初のほうで述べた「表3と表5を虚心坦懐に眺め」で見出しうる「2

つの興味深い」点の第2番目について開陳すべきであろう。それは、最初のほうに記載されている人物ほど、アイテム数（もしくは売却金額）が多いのではないかという、おぼろげな印象である。すなわち、アイテム数順（もしくは売却金額順）に人物が並べられているのではないかとの推測である。ただしこの推測は、すでに証明した同一アイテム、同一カテゴリーの原則を覆したり、それと矛盾したりするものではない。あくまでもその最初の原則を守りつつ、それに準拠したうえで、さらにその並べ方（すなわちカテゴリー間の順序）に、ある程度の法則性を与えるものではないかとの仮説なのである。

そこでこの仮説を実証するために、第1回目の競売、第2回目の競売それぞれのデータに対して、回帰分析をおこなった。いずれの場合も単回帰式で、独立（説明）変数（ $x$ ）を「記載順位」とし、第1回競売では全76名の順位、すなわち1-76、第2回競売では全50名の順位、すなわち1-50の数値を当て、従属（目的）変数（ $y$ ）は「品数」（アイテム数）と「金額」（ペンス表示）とした。むろん、独立変数を「品数」（ $x_1$ ）と「金額」（ $x_2$ ）の2つとし、従属変数を「記載順位」（ $y$ ）とする重回帰モデル（すなわち重回帰式は  $y = a_0 + a_1 x_1 + a_2 x_2$ ）を用いて両独立変数の有効性の比較をおこなうことも考えられうるが、実際に品数と金額の相関係数を算出してみると、両者は明らかな正の相関——必ずしも強くはないが——を示し（第1回競売：0.312、第2回競売：0.429）、そのため当該の重回帰式は多重共線性（マルティコ）の発生が否めないことから、かかる重回帰モデルでの分析は避けるべきであろう。

さて、上記の単回帰分析の結果は以下のとおりである。まず、従属変数を「品数」（アイテム数）とした場合は、それぞれ次のようになる。

[第1回競売]

$$y = 3.555 - 0.024 x$$

$$(6.784^{**}) (2.029^*) \quad R^2 = 0.052$$

[第2回競売]

$$y = 6.041 - 0.107 x$$

$$(8.198^{**}) (4.274^{**}) \quad R^2 = 0.275$$

第1回目の場合、決定係数は高くなく、独立変数の傾きも5%の有意水準をクリアするのみであるが、記載順位が1つ下がると（すなわち数値としては1つ大きくなると）、平均してアイテム数が0.024個減る、といえる。第2回目の場合は、決定係数はある程度高く、独立変数の傾きも1%の有意水準をクリアしている。すなわち、記載順位が1つ下がると、平均してアイテム数が0.107個減る、といえるのである。

次に、従属変数を「金額」（ペンス表示）とした場合は、それぞれ次のようになる。

[第1回競売]

$$y = 978.536 - 10.116 x$$

$$(5.813^{**}) (2.663^{**}) \quad R^2 = 0.279$$

[第2回競売]

$$y = 570.273 - 5.346x$$

$$(2.726^{**}) \quad (0.748) \quad R^2=0.011$$

第1回目の場合、決定係数はある程度高く、独立変数の傾きも1%の有意水準をクリアしている。すなわち、記載順位が1つ下がると(数値としては1つ大きくなると)、平均して売却金額が10.116ペンス減る、といえる。第2回目の場合、決定係数は高くなく、独立変数の傾きはまったく有意でないが、計算結果をそのまま読めば、記載順位が1つ下がると、平均して売却金額が5.346ペンス減る、といえる。

上記の結果から、アイテム数については、ほぼ仮説の通りであり、売却金額についても、第1回目競売については仮説通りの数値が出たと言えよう。そして先述したように、アイテム数と売却金額には正の相関があり、それを踏まえて考えれば、アイテム数や売却金額に応じて順位が定まる傾向にあるというわれわれの仮説は証明されたと言ってよかろう。ただ、さらに細かくこの仮説を検証するために、史料のページごとに同様の作業をおこなっておきたい。すなわち、ページごとに(ページを改めるごとに)、上記の原則、つまりアイテム数や売却金額数に応じて順位を定めていったのではないかという、いわば仮説のコロラリー(系)の検証である。

表8が従属変数をアイテム数とした、ページごとの単回帰分析結果であり、表9が従属変数を売却金額(ペンス)とした単回帰分析結果である(切片の数値は省略している)。さて、まず先に表9から見ると、いずれの数値もパフォーマンスはかなり悪く、唯一、第1回目の「第3ページ」のみが、5%の有意水準をクリアするのみである(たとえば「第2ページ」では、最後の人物サミュエル・ギディングズの数値(x=26, y=3153)が特異に大きく、これに引っ張られる形で傾きはマイナスですらなく、大きくプラスになっている)。したがって、ページを改めるに際して、記者が売却金額を念頭に置くことはなかったと考えてよかろう(ただし、アイテム数との相関はありうる)。

表8 ページごとの単回帰分析(従属変数:品数)

競売	頁	傾き	t値	R <sup>2</sup>
第1回	2	-0.139	-2.112*	0.156
	3	-0.035	-0.844	0.024
	4	-0.227	-3.206**	0.363
第2回	5	-0.235	-1.323	0.098
	6	-0.088	-3.202**	0.254

独立変数: 2ページ:1-26、3ページ:27-56、4ページ:57-76、5ページ:1-18、6ページ:19-50<sup>(1)</sup>。\*\*:1%で有意。\*:5%で有意。

表9 ページごとの単回帰分析(従属変数:金額[d])

競売	頁	傾き	t値	R <sup>2</sup>
第1回	2	18.553	0.800	0.025
	3	-40.320	-2.641*	0.199
	4	3.834	0.304	0.005
第2回	5	-25.617	-0.732	0.032
	6	-0.918	-0.066	0.000

独立変数: 2ページ:1-26、3ページ:27-56、4ページ:57-76、5ページ:1-18、6ページ:19-50。\*\*:1%で有意。\*:5%で有意。

次いで表8を見ると、第1回競売の「第2ページ」、「第4ページ」、第2回競売の「第6ページ」の傾きは有意水準をクリアしており（とりわけ後者2つは1%の水準をクリア）、全体としてパフォーマンスは良い。すなわち筆者はページを改めるごとに、アイテム数に気を配っていた様子が見えてくる。つまり先に見たように、全体としても（すなわち全ページを通して）、アイテム数の順序に気を配っていただけでなく、同一アイテム、同一カテゴリーがページを改めた際に出現した際には、そのページでの順序もある程度意識していたと考えることができよう。

さて本節における以上の分析により、2つの原則（さらに1つのコロラリー）の存在が浮かび上がった。すなわち、アイテムの同一性に関する上位の原則の下に、さらにアイテム数（売却金額）の多寡に関する下位の原則が存在しており（コロラリーも含めて）、この2つの原則が同時に（混じり合って）適用されているために、一見したところ、人名がランダムに見える状態が作り出されているといえるのではないだろうか。ただし、これらの原則をすべて、当該史料筆者が明確に意識していたかどうかは自明ではない。ある程度の準拠則としてとらえていた可能性も否定はできないであろう（とりわけ第2の原則の場合）。また仮に、当該史料筆者が無意識にこのような作業をおこなっていたとしたら（蓋然性は必ずしも高くはないが）、本稿はその無意識の原則をあぶり出したことになる。

ともあれ、今回見出した原則を、どの程度まで一般化できるかは定かでないが、少なくとも、同時期の同様の史料を考察する際には、一つの参照軸となろう。さらに広げて、当時の一般的な財産目録（inventory）等に記載されたアイテムのカテゴリの分析にも、役立つ可能性があるかもしれない。

そして、前節でも触れた、故ジョン・チョートと落札者との親密度（関係性の遠近）の問題と、本節で考察した第2の原則、すなわちアイテム数や売却金額の多寡とは、大いに関連している可能性もある。次稿では、彼の人間関係のネットワークを、それらの分析を通じて析出してゆくことにしたい。

## 註

- (1) ちなみに表8において、たとえば3ページ目の独立変数を27-56ではなく、1-30として計算しても、むろん切片の数値は変わるものの、傾きについての結果はt値を含めてまったく同じとなるため、このような独立変数の設定で問題は生じない。

キーワード：建国期アメリカ、イプスウィッチ、ジョン・チョート、回帰分析

【史料4】5ページ

【史料5】6ページ

**Abstract**

A Note on the New Historical Documents of a Local Worthy, John Choate  
in Early National Massachusetts (Part 2)

Mitsuhiro Wada

This article's main contribution is bringing to light some never-before-seen documents written at the end of the 18th century and now owned by the author privately. The newly found manuscript documents pertain to John Choate (1737–1791), who was a local worthy in Ipswich, Massachusetts, and yet an obscure individual from historical perspective. The documents, therefore, have *never* been filed as a part of the Choate Family Papers in the Phillips Library at the Peabody Essex Museum in Salem, Massachusetts though they have a lot of information about a “common” people's micro world connected with a macro market. At first, in this article (part 2), we decipher the handwriting with full of abbreviations on several pages of the manuscript documents and produce the printed text of some part of the manuscript with their photos. By analyzing his consumption goods and production goods listed in the text, we unraveled the world of John Choate, and utilizing statistical technique such as a regression analysis, revealed a sort of rules (two rules plus one corollary, actually) concerning the system of entry order of our account documents, that could be applicable to other contemporary parallel documents.

Keywords: Early National America, Ipswich (Massachusetts), John Choate, public vendue, regression analysis